

農作物技術情報 第6号 水稻

発行日 令和5年 8月29日
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
 編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
 パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

気温がかなり高く推移しており、平年に比べ刈取り適期は大幅に早まると予想されます。刈遅れは胴割粒の発生等による品質低下や食味低下につながるため、適期刈取りを心掛け、高品質米生産を目指しましょう。

- ・ 黄化粳80～90%に達したらテスト粳摺りを行い、刈取りの可否を判断しましょう。
- ・ コンバインや乾燥調製施設の点検、整備は早めに行いましょう。
- ・ 粳の乾燥は二段乾燥を心がけ、玄米水分15%以下に仕上げましょう。
- ・ 異品種混入（コンタミ）対策を徹底しましょう。

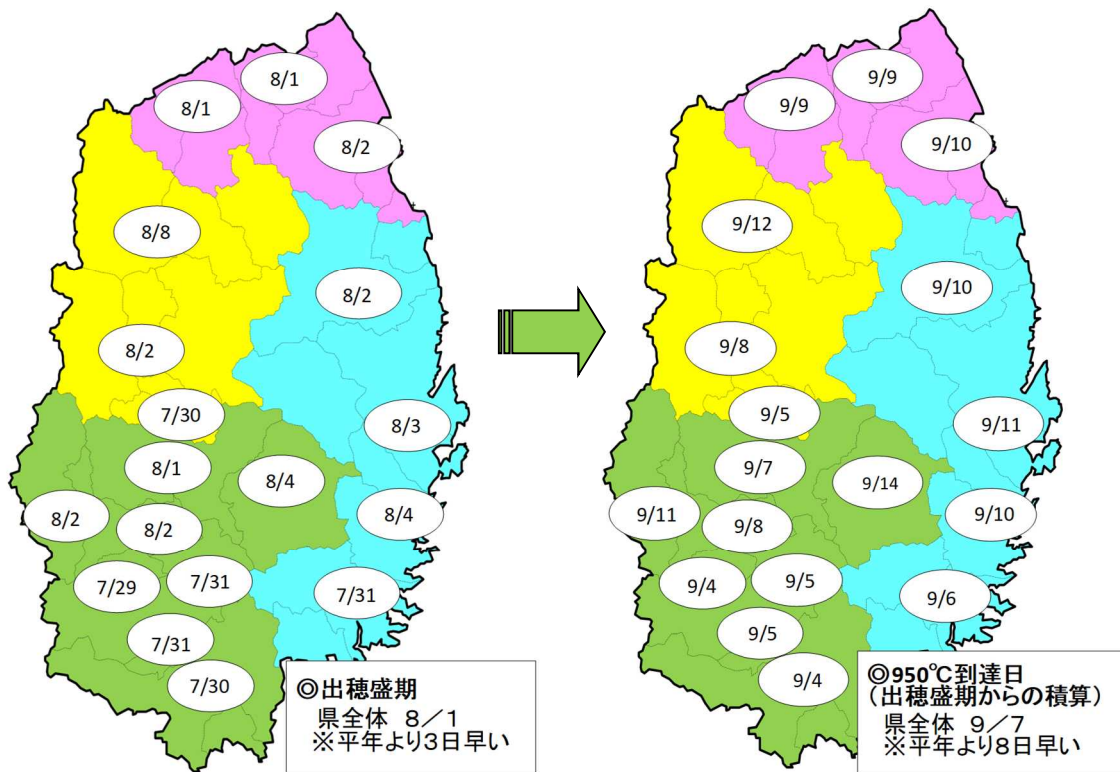


図1 各地域の出穂盛期から予測した刈始めの目安日（積算気温950℃到達日）

- 1) 左側：各地域の出穂盛期（月/日）、右側：刈始めの目安（月/日）
- 2) 刈始めの目安は、各地域の最寄りのアメダス地点について、登熟積算温度950℃となる予測日。（8月26日までは各地域の代表アメダスの現況値、8月27日以降は平年値を使用）

1 気象経過

(1) 概況

穂ばらみ期にあたる7月第5半旬から登熟期間の8月第5半旬にかけて、気温は平年よりもかなり高く推移し、日照時間は平年並からかなり高く推移しました（図2）。

8月13日には局地的に猛烈な降雨があるなど、8月第3半旬は雨や雷雨の日が多く、100mmを超える降水量も観測されました（図2）。

(2) 今後の見通し

東北地方の1ヶ月予報(仙台管区気象台8月24日発表)では、平均気温は高い確率80%と予想されており、期間の前半(8月26日~9月8日)は気温がかなり高くなる見込みです。

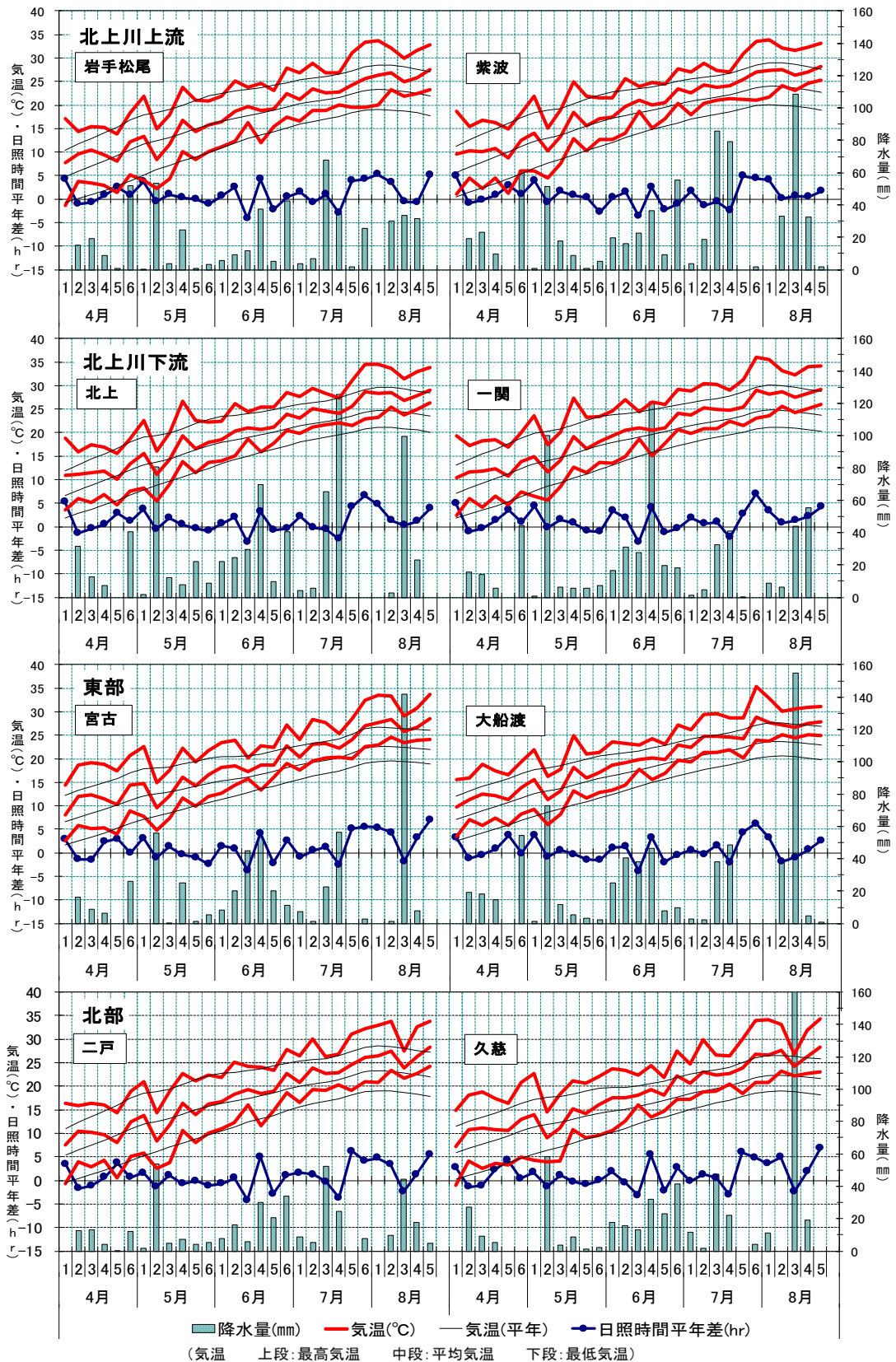


図2 半旬別気象経過図(4月第1半旬~8月第5半旬※8月25日まで)

2 玄米品質を低下させない水管理

(1) 登熟期の水管理

- ・ 間断かんがいを基本とし、徐々に落水期間を長くしていく管理とします。中干しが十分でない圃場は落水期間を長めにとり、機械収穫に必要な地耐力の確保を図ります。
- ・ 完全落水は排水不良田で出穂後30～35日、排水のよい水田で出穂後35～40日頃を目安とします。
⇒ 乾かしすぎ（表土の白化・亀裂）は収量や品質低下につながるので注意
- ・ 遅植えや直播栽培などの出穂が遅い圃場において、登熟の早い段階で用水が利用できなくなる場合も、排水口を閉じるなどして、乾かし過ぎない管理とします。

(2) 台風や大雨時の水管理

- ・ 台風、大雨等で浸水や冠水の恐れがあるときは、排水口を開けて排水を促します。
- ・ 浸水や冠水した圃場では、速やかな排水に努めます。長時間の冠水は登熟に悪影響を及ぼすため、少しでも早く排水し、水稻の葉先を出すことが重要です。
- ・ 台風通過後は稲体が水分を失いやすいため、田面が急激に乾かないよう間断かんがいとします。

3 適期刈取りの遵守

(1) 刈取り適期の予測

- ・ 刈始めの目安となる出穂後の日平均気温の積算気温950℃到達日は平年よりも大幅に早まる見込みです（表2、図1）。収穫適期を過ぎると胴割粒の発生等の品質低下や食味低下につながるため、刈遅れないよう十分に注意してください。
- ・ 登熟の進み具合は気温・日照時間だけでなく、栽培管理も影響します。積算気温の予測のみに頼らず、実際の籾の黄化をよく観察した上で刈取りの可否を判断することが大切です。
- ・ 共同乾燥調製施設を利用する場合は、施設の稼働時期を確認し、作業計画を立てます。

表1 おもな品種の積算気温による刈取り適期の目安

品種名	刈取適期の積算気温（℃）
ひとめぼれ	900～1,050
金色の風、銀河のしずく、どんぴしゃり、いわてっこ	950～1,050
あきたこまち	950～1,100
ヒメノモチ、もち美人	950～1,050
めんこもち	1,000～1,100

表2 各地域の出穂期と積算気温950℃到達日（刈始めの目安日）の予測

地帯	出穂期（月/日）		登熟積算気温950℃到達予測					
			予測①（平年±0℃）			予測②（平年+2℃）		
	本年	平年差（日）	950℃到達日（月/日）	平年差（日）	950℃到達日（月/日）	平年差（日）		
	始 盛 終	始 盛 終	始 盛 終	始 盛 終	始 盛 終	始 盛 終		
北上川上流	7/30 8/2 8/4	-2 -3 -5	9/5 9/8 9/12	-7 -9 -11	9/4 9/7 9/12	-8 -10 -11		
北上川下流	7/28 8/1 8/4	-4 -3 -4	9/2 9/6 9/10	-8 -8 -10	9/1 9/5 9/9	-9 -9 -11		
東 部	7/28 8/1 8/6	-5 -4 -4	9/3 9/9 9/15	-9 -8 -7	9/2 9/7 9/13	-10 -10 -9		
北 部	7/29 8/1 8/5	-4 -4 -5	9/6 9/9 9/14	-9 -11 -12	9/5 9/8 9/13	-10 -12 -13		
県 全 体	7/29 8/1 8/4	-3 -3 -5	9/3 9/7 9/11	-8 -8 -10	9/2 9/6 9/10	-9 -9 -11		

- 1) 出穂時期…始期：10%、盛期：50%、終期：90%の水田で出穂した日。
- 2) 積算気温950℃到達予測…日平均気温が各地域のアメダス平年値並（±0℃）、2℃高い（+2℃）場合の950℃到達日。（8月26日までは各地域の最寄りアメダス現況値、8月27日以降はアメダス平年値）。

(2) 刈取り適期の判断

積算気温による予測は、栽培条件や日照の多少によってずれる場合があるため、最終的な刈取りの判断は次の手順により、実際の登熟状態を確認しておこないます。特に本年は、高温により刈取り適期が早まる見込みのため、刈遅れには十分注意しながら、圃場毎の登熟状況をよく観察したうえで判断します。

ア 黄化籾割合のチェック

平均的な大きさの穂を観察し、黄化した籾が1穂籾数に占める割合を確認します。刈取り適期は「黄化籾割合80~90%」（参考：図3）です。



図3 黄化籾割合90%の穂の状態

イ テスト籾すりによるチェック

黄化籾割合が80~90%に達したら、数穂を採取しテスト籾すりします（図4）。

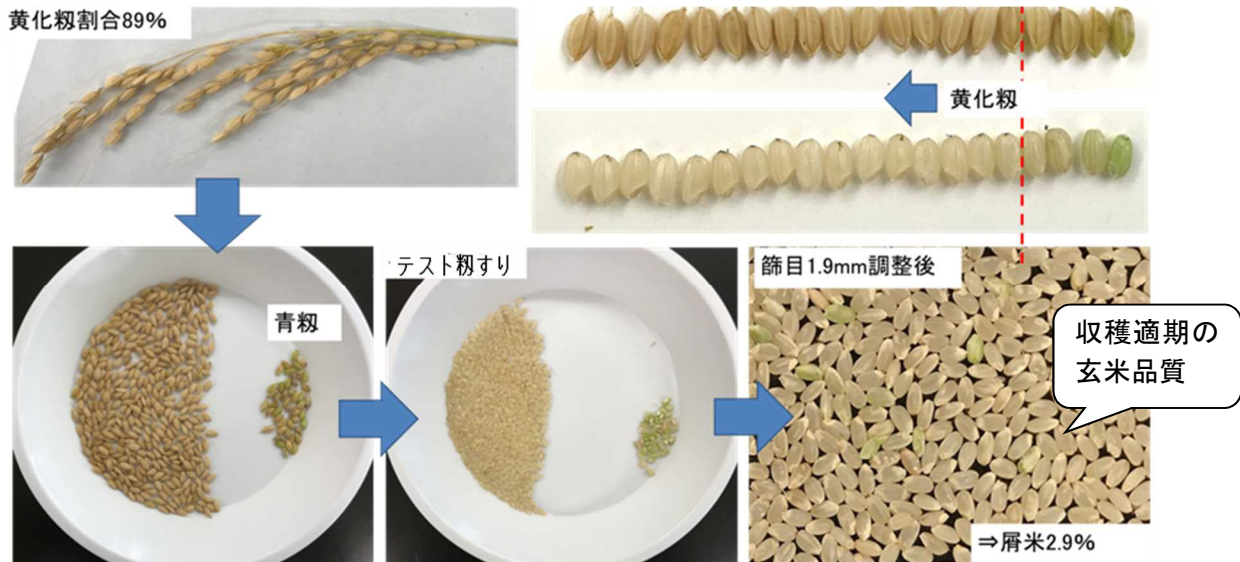


図4 黄化籾割合80~90%時のテスト籾すり後の玄米の状態

(3) 収穫作業の留意点

- ・ コンバイン収穫では、作業開始前に籾水分が20~25%の範囲であることを確認します。
- ・ 収穫後は生籾のまま放置せず、速やかに乾燥調製施設へ搬入します。
- ・ 水口付近などで登熟が大幅に遅れている部分や、倒伏した部分は可能な限り刈分けを行い、青未熟粒等の混入を避けます。

4 乾燥・調製の留意点

仕上げ水分は15.0%以下を徹底！！

(1) 胴割れ粒の発生防止

- ・ 火力乾燥においては、1時間あたりの水分減少率（毎時乾減率）を0.8%以下とします。
⇒ 乾燥速度を上げすぎると胴割れ粒が発生するため、急激な乾燥・過乾燥に注意します。
- ・ 4%以上の水分差がある粳を一緒に張り込むことは避けます。
⇒ 粳水分18%の時に一旦乾燥機を止めて放冷・循環常温通風し、その後仕上げ乾燥して粳水分の均質化を図ります（二段乾燥）。
- ・ 自然乾燥（ハセ・棒がけ）は2週間以内を目安とし、時々掛け替えして乾燥を促します。

(2) 粳すり時の肌ずれ、脱ぶの防止

- ・ 肌ずれを防止するため、玄米水分15.0%以下の適正水分で粳すりを行います。
- ・ ゴムロールのすき間は、粳の厚さの約1/2（0.5～1.2mm）が標準です。
- ・ 脱ぶ率は条件により変化するので、85%程度になるようロール間隔を調整します。

(3) ライスグレーダー

出荷製品用は、LL（1.9mm）の篩い目使用を基本とし、整粒歩合80%以上を目指します。

5 異品種混入の防止

- ・ 産地から出荷する米穀は「表示銘柄以外の混入のない米」であることが必須です。
- ・ 異品種混入（コンタミ）が発生すると、品種名の表示ができなくなることに加え、産地全体のイメージダウンとなります。
- ・ コンバイン、運搬機、乾燥機や粳摺機など収穫・乾燥・調製機械や施設内には、前年の粳等が残留している可能性があるため、これらの機械や施設の点検・清掃を十分に行います。

6 農作業安全

収穫時期は日没が早まり、例年農作業事故の発生が多くなります。余裕をもった作業計画をたてるとともに、作業機に反射シールを貼る等、交通事故防止対策を講じます。

次号は9月28日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。